

# 高松塚古墳壁画撮記

網 干 善 教

## (一)

私たちが奈良県明日香村の高松塚古墳を発掘調査したところ、右檜内に見事な壁画が描かれていた。壁画の内容は、日月、星辰（星宿・星座）四神、群像であった。この壁画をめぐるいろいろな意見が、新聞・雑誌や学術論文に掲載されたが、これらの壁画は一体何を意味しているのだろうか。

## (二)

高松塚古墳が検出されたとき、先ず問題になったのは四神図である。東側の壁面の中央に青龍の図、これに対する西側の壁面の中央に白虎の図、北側奥壁の中央に玄武の図が描かれていた。ただ、南側の壁面には当然、朱雀の図が描かれていたであろうが、これは以前の盗掘によつて消失したものであらうと考える。

ところでこのような四神図を墳墓に描くというのは、古代の中国にもあるし、高句麗古墳に多くみられる。高松塚古墳にこの四神図が描かれていたから、これは高句麗文化の影響であるとか、あるいは、高句麗に関係する

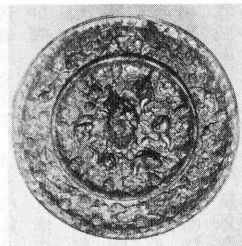
画師が描いたという意見、さらには高松塚古墳の被葬者が、高句麗からの帰化人ではないか、という見解まで述べられるようになった。果してそうであらうか。

一方、壁画には東壁面に男子四人、女子四人、西壁面にも男子四人、女子四人の計十六人の群像が描かれていた。いづれも見事な筆致での人物像である。高松塚古墳に対して、多くの人たちが関心を示されたのも、また、戦後最大の発掘成果と評価されたのも、実はこの人物像に関心が集まったのではないかと思う。だが、問題は単に見事な極彩色の人物が描かれていたということにだけ興味をもつてはいけなさと考える。高松塚古墳に関心をもちとすれば、また、理解しようとするれば、もつと基礎的なことを知っておかなければならない。

そこで、四神図について考えてみよう。

## (三)

先ず四神とは「青龍・朱雀・白虎・玄武」をいい、その淵源は、天の思想であつて、『爾雅』釈天に「四方皆



有「七宿」、各成「二形」、東方成「龍形」、西方成「虎形」、皆南首而北尾、南方成「鳥形」、北方成「亀形」、皆西首而東尾」とある。すなわち、四神は星宿に本源がある。この星

宿とは、はじめに記したように星座であつて、天空の星座を東・南・西・北の四方に分け、その各々の方向に七つの星宿を考え、東方七宿・南方七宿・西方七宿・北方七宿とする。この各方向の七宿は、また一つの形象をなしている。東方は龍の形、南方は鳥の形、西方は虎の形、北方は亀の形をなしているとする考え方である。いわば、それらは中央を中心にして四方に配置する形となる。

ところで、四神はあくまでも天の具象であるが、同時に四方を守護するの具象であるともされる。例えば、漢式鏡の銘文に「漢有名銅出丹陽、和以銀錫清且明、左龍・右虎・主四彭、朱爵・玄武・順陰陽、八子九孫治中央」とか「左龍右虎掌三（四）彭、朱爵（雀）玄武順陰陽」あるいは「左龍右虎辟不祥」といった語句がみられる。この「龍・鳥・虎・亀」を何故「青龍・朱雀・白虎・玄武」と呼ぶのであろうか。それはまさしく五行色なのである。「青・朱（赤）・白・玄（黒）」であつて、四神図を方位の色であらわしている。

四季をいうのに「青春・朱夏・白秋・玄冬」という言葉がある。春は青、夏は赤、秋は白、冬は黒である。春夏秋冬という季節の移りかわりは青赤白黒の変化である。青龍は東の壁に、朱雀は南の壁に、白虎は西の壁に、玄

武は北の壁に描かれる。このことは、東が青、南は赤、西は白、北は黒ということである。

#### 四

そこで、いろいろなことが思い出されるであろう。例えば、毎年六回十五日間、テレビで放映される大相撲、この土俵の上の四方の幕に垂れる房の色が、東が青房、南は赤房、西は白房、北は黒房ということになる。またその方向の順序が東・南・西・北である。そうすると佛説阿弥陀經では、東方世界からはじまつて南方世界、西方世界、北方世界の順である。四天王を呼ぶ場合も、東方持国天・南方增長天・西方広目天・北方多聞天という順である。

中国遊技である麻雀の場合もそうであろう。これは恐らく、同じ理由に起因するものと考えてよい。

だが、これではまだ十分に理解できないことがある。それは、五行色であるのに青・赤・白・黒の四色しかない。一色不足することになる。とすればとりもなおさず「黄色」であることは、誰もが気付くであろう。この黄色は、中央を意味する。高松塚古墳では、石槨の天井に描かれていた金色の星座が、これに該当すると考えてよい。大相撲でいえば、中央の土俵である。その場合、黄色を加えると、五色の色の順はどうなるのか。

『唐開元禮』などをみると、「青・赤・黄・白・黒」の順である。当然、黄は中央であるから、五色の色順も中央と



なる。しかし、日本の佛教や神道では「青・黄・赤・白・黒」の順に並ぶことが多い。寺院で法要が営まれると、五色の幕が張られ、五色の吹流しが掲げられる。その色の順は「青・黄・赤・白・黒」である。ただし、黒を紫に代えて使用することは往々にみられる。

私は寺院で育ったが、子供の頃から、師僧である父から「青・黄・赤・白・黒」といながら色紙を揃えさせられた。そういえば「七夕」の紙も五色であり、青・黄・赤・白(天の川に星が印刷してあるが本来は白)黒色(紫を使っている)である。神道でも神前に樹てられる「真<sup>ま</sup>神」の幡がこの五色である。

五月の旅は楽しい。それはほかでもない。青空に泳ぐ「鯉のぼり」この吹流しも本来は「青・黄・赤・白・黒」の五色であるが、正しい吹流しは少くなく、不適当な色を混ぜている。恐らく、鯉のぼり屋さんが知らないのかも知れない。このような例をあげていくと他にもいろいろある。

## (五)

そこで考えなければならぬ大切なことは、高松塚古墳の描かれた今から千数百年以前も、いやもつと古く、中国では二千年以前からこの思想がある。そして、今日の私たちの生活のなかでも、生活の周辺にも及んでいる。それは何故だろうか。

私は、過去から現在に、さらに未来へと連る大きな歴

史の流れがあり、そして、その思想が不変であると思うのである。釈迦の教が、法然上人に伝えられ、八百年後の今の私たちの生活に受け継がれ、念佛の生活を営む。これは、また将来も絶えることがないであろう。如何に政治体制に変化があつたとしても、また個々の日常生活に変遷があつたとしても、思想は変化なく生きているのである。歴史とは、思想とは、そのようなものであると考えるをえない。

高松塚古墳の壁画が描かれた時代や思想の基調は、今日なお私たちの生活のために生きていると思う。このことは、高松塚古墳の壁画は、私たちの生活とは全くかわりのないことではなく、むしろ、千数百年を経た今日も、なお、連綿として受け継がれていることをしめすものであり、歴史的存在を認識するのである。「温故知新」とはそのことである。

与えられた紙面では、他の問題については言いつくすことはできないが、高松塚古墳の壁画が単に「美しい」とか「見事である」とかといった、単なる感動的な受けとり方だけでなく、歴史的、思想的な意義や、今日的な意味を見出してゆかなければならないと思う。こうすることに、高松塚古墳の壁画に対して関心をもち、歴史を知り、自分を知ることが生れてくる。そこに高松塚古墳をみる意義があるのでなからうか

(文学部講師)